

砂川学習館・地域コミュニティ機能複合施設整備事業を進めます

令和7年度の供用開始に向けて、複合施設の整備を進めており、令和5年7月から砂川学習館の解体工事と砂川学習館・地域コミュニティ機能複合施設の新築工事を行います。このため砂川学習館(子育てひろばを含む)は令和5年4月から令和7年3月まで休館となります。休館に伴う仮事務所の場所等は、市ホームページ等で今後お知らせします。

新たな複合施設は、砂川学習館で担っていた生涯学習機能・子育て支援機能に、集会・交流といった地域コミュニティ機能を合わせ、多世代交流によるにぎわいの拠点となる場を提供します。

砂川学習館・地域コミュニティ機能複合施設の完成イメージパース



砂川学習館係 ☎(535)5959

立川市の
歴史と
文化財

51

関東大震災と立川飛行場



写真1：震災当日の都心から立ち上る煙

令和5(2023)年は関東大震災から100年となる節目の年です。関東大震災は大正12(1923)年9月1日に起きたマグニチュード7.9と推定される大地震で、東京府(現在は都)では震度6を観測しました。都心では建物崩壊のほか、地震発生時刻(11時58分)が昼食の時間と重なったことで広範囲におよぶ延焼火災が発生し、甚大な被害をもたらしました。関東大震災の前年、大正11(1922)年に完成した広大な立川飛行場からは、都心から立ち上る火災の煙が見えました(写真1)。当時、砂川尋常高等小学校(現在の第八小学校)に通学していた中野藤吾氏は始業式を終えて帰宅したのち震災に見舞われ、「午後二時頃南東に当りて蒙々たる白雲否白煙立ち上れり。(夜になり)屋見し煙の方を眺むれば東天は焦げんばかりに赤く、わが住む所、東京を距る約八里(約32km)、而かも火の光に

照されて、微かに我が影を認むるに至る」(「大震災の記」大正12年、立川市蔵)と記録しています。
また、第九小学校百年誌『あしっこ』(昭和55年)でも震災を振り返り、「まわりの家々は(中略)いまにもつぶれそうにふらふら左右に物凄くゆれ、家々の壁がばらばら落ち、土蔵の壁もひびわられて、ばたばたと大きな音を立てて落ち、土けむりがもうもうと立ち、暗い感じがするほどでした」と記されています。強い余震も非常に多く、どの家の住人も家から竹藪に避難し、数日は竹藪で野宿したといっています。現在の柴崎町にある玄武山普濟寺の国宝・六面石幢が横倒しになるなどの被害もありました。しかし、立川市域では幸いにも家屋倒壊などの大きな被害はなく、土蔵や物置の全半壊や破損に留まったようです。
* * *
立川飛行場も被害はそれほどなかったため、壊滅状態で交通・通信手段を絶たれた大都市圏の飛行場に代わって、大震災の情報・救援物資の要請などを各地へ伝える拠点となりました。その後、被害をうけた都心の飛行場から民間の航空会社や飛行学校が立川飛行場へ移転してくると、海外からの来訪飛行もたびたびありました。航空機による郵便・貨物・旅客輸送事業も発展し、空の都立川の名が世界的にも広まりました。昭和3(1928)年に政府支援を受けて設立した日本航空輸送株式

会社もその一翼を担った一社で、立川飛行場の南西地区に東京での拠点を設け、昭和4年から営業を開始しました。翌年には、より郵便の利便性を高める目的で、立川飛行場内に航空郵便ポストが設けられます(写真2)。郵送にかかる時間は立川から大阪まで2時間30分程度と、それまでの陸路便(汽車で10時間以上)と比べれば雲泥の差でした。日本航空輸送株式会社が発行した昭和6年の航空郵便案内(写真3)によれば、運賃は158までの有封書状で汽車の6倍、18銭かかりました。また、航空郵便のポストが「空色」だったことなども記されています。遺されている写真資料はモノクロのため判断できませんが、立川にあったポストも「空色」だったのでしょうか。これらの民間の航空会社や飛行学校は、昭和6年の羽田飛行場完成とともに徐々に移転しますが、立川飛行場の名は皮肉なことに、関東大震災を経たことで世界へ広く知れ渡ることとなったのかもしれない。
さて、歴史民俗資料館では、6月13日(火)から7月9日(日)まで、企画展「新収蔵品展」を開催します。本稿でご紹介した日本航空輸送株式会社の航空郵便パンフレットのほか、令和4年度に市民の方から寄贈していただいた資料を展示します。ぜひ会場までお越しください。
◎歴史民俗資料館(生涯学習推進センター)文化財係 ☎(525)0860

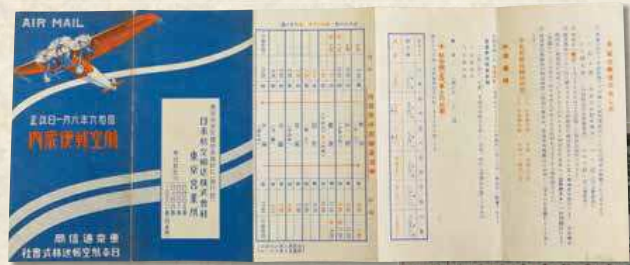


写真3：立川飛行場の航空郵便案内パンフレット



写真2：立川飛行場の航空郵便ポスト